長崎原爆遺構を歩く ①

県原水協常任理事　内田　武志

被爆から六十三年のことし、長崎市内にはいまも各所に原爆遺構・遺跡として、当時の原爆の恐ろしさを伝える建物などが残っています。夏休みです。若い世代が被爆の実相を引き継ぐためにも、もう一つのナガサキを紙上で旅してください。長崎県原水協常任理事の内田武志さんに寄せていただきました。

秒速200メートル　爆風のあと

爆心地から南東約八百㍍にある「一本柱の鳥居」は、長崎原爆のすさまじさの痕を残す数少ない遺構の一つです。この鳥居は山王神社の二の鳥居です。原爆の強烈な熱線が鳥居の上部を黒く焼き、次の瞬間には秒速二百㍍の爆風が襲い、爆心地側の半分を破壊しました。よく見ると残された笠石(かさいし)は風圧でねじ曲げられています。

また、柱には奉納者の氏名が刻まれていますが、爆心地方向の名前は熱線で柱石に含まれた雲母が溶け出し、氏名が読めなくなっています。爆風で倒壊した部分は近くに無造作に積まれたままです。

爆風で片方が倒壊した一本柱の鳥居

一本柱の鳥居

坂本町4―5

一の鳥居は爆心地に平行に建っており、被爆後も健在でしたが、現在は姿を消しています。三の鳥居の片足は、坂本町民原子爆弾殉難碑として山王社入り口に建っています。

当時山王地区で家族全員が生き残ったのはただ一家族のみであり、およそ七百人が爆死、坂本全町では三千人が犠牲になったといいます。

山王神社には樹齢五百年といわれる二本の大クスがあります。原爆で見る影もない姿になり、蘇生（そせい）はおぼつかないとおもわれたこの被爆クスの木は、その年の十月には新芽を吹き、次第に樹勢を盛り返し枝葉を茂らせ、戦後復興に希望を与え、地域の人々を励ましました。（つづく）